親不知子不知

一話―その母の自慢の息子たち二人の間の往き来がとだえて十年にもなる。母は亡夫と共に建てた東京のわが家で、二男一家と永らく同居してきた。しかし、長男が故郷で住宅を新築したので、そこに移った。二男には「建築費を分担してやらねば」と言って、二男が住んでいる家を無理やりに買わせた。てっきり兄の入れ知恵と、二男の恨みは長男に向けられる。しかし、母は長男には一銭も渡していない。

母は教員だったから年金は高額、でも頼れるものはお金だけと思っているにちがいない。

二話―やはり私の身近い人たち。そこの父が死亡したとたん遺産争い。東京だから、そのマイホームは億を軽く越していたから。それまでは一階に二男一家、二階は長男一家と母が住んできた。家を出ている長女、二女が激しく迫った。「母も弟たちも家を出ろ。売って分配すべきだ」と。数年かかって裁判で決着。長女、二女の受けとるべき額（利子も含め）を家賃の形で支払う。不履行に備えて母と弟の生命保険証は娘

が抑える。娘たちは貧しくはない。鎌倉にセカンドハウスを造るためにと言ってはばからない。

ある家の長男は分け前が平等とはけしからんと、親たちのお位牌を拒否、今はお寺に。

これらの人たちを非難することはたやすい。自分たちの場合はどうだろう。心がけ論だけではすまされない。政治や体制と深くかかわる面があることを見失うわけにはいかない。

（一九九一年十月八日）